

稲作

令和7年稲作を振り返って

「豊年にも大凶作あり 気を付けて見よう」

生育概況

東北農政局より10月10日に令和7年産水稻の作付面積及び9月25日現在の予想収穫量が発表されました。10a当たり予想収量は県南で576kg、作況単収指数は103で前年より多くなっています。JA検査実績でも一等米比率は90%以上と品質も良好となっています。収量が良かったという声を聞きますが、振り返ってみると課題もあつた年でした。聖農石川理紀之助翁が残した言葉にあるように「豊年にも大凶作あり。気を付けて見よう」。各自でも振り返りをし、良かった点、改善が必要な点を洗い出し、次年度の対策としましょう。

覚えていますか？令和7年稲作

月	事柄
冬	積雪量は例年並み程度にあつた。
3月	雪解けは3月中旬。
4月	4月は降水量が平年比158%、日照時間が平年比44.8%、気温は平年比+1.4℃、116%であつた。 ほ場が乾かず、肥料散布、耕起がはかどらない。
5月	苗質は葉色淡く、やや軟弱気味。 苗焼けは少なかった。 田植え盛期は5/25(平年差+1日)。 前年のワラ、春先の下草(スズメノテッポウなど)、早くからワキが発生。
6月	軟弱苗でもあつたことから、ワキ、除草剤の影響を受け、生育緩慢。 草丈長めで生育。6月後半から茎数回復(見かけ上の茎数が回復しただけ、弱勢茎多い)。
7月	生育ステージ前進、草丈伸長止まらず。 7/11宝風、葉色低下、生育シタッと止まる。 少雨、高温予報で追肥指導。 7/20頃から出穂しだす株あり。 出穂期7/31、干ばつ被害発生。
8月	8/5から大雨。恵みの雨となる。 定期的に降雨。 8/19、9/2に上桧木内で大雨。ほ場に土砂流入。 8月下旬から登熟緩慢に。
9月	登熟期間中は、平均気温こそ高かつた(平年比1~2℃高)ものの、最低気温が平年並みであつたことで登熟は良好。 秋雨前線の影響により断続的な降雨。ほ場の軟化。コンバイン「わだち」発生。

皆さんが気づいた点がありますか？気になった点は対策を考えましょう。

稲作基本技術 八十八手の第一手

◎ほ場準備

稲を育てていく土台であるほ場の準備は、前年の稲刈り後から春先までに行わなければなりません。降雪期間を除いて秋から春にかけては「ほ場を乾かす」ことが第一です。明渠、サブソイラ等で積極的な排水・透水性改善をして乾田化を促進させます。異常還元発生抑制にも一役買います。

◎育苗

出芽が揃うことで、その後の育苗管理がしやすくなります。そのためには、浸種、催芽の温度管理徹底とハト胸を見逃さないことが重要になります。加えて、近年は高温で苗の生育が早まることが多く、ハウス開放が足りず伸び気味の生育となることもありま



◎田植え

疎植、小苗になりすぎていないか、栽植密度、植え込み本数の再確認を。5月末からの田植えでは、かき取り本数を増やすなどして、面積当たりの茎数確保する工夫も必要です。

◎初期生育

活着までは浅水管理(2~3cm)、その後深水管理(5~7cm)を1週間程度。深水管理後は飽水管理(間断かん水)とします。定期的に落水してガス抜きと土中への酸素供給をして異常還元対策をします。天候などによっては活着肥も効果的です(6/10頃まで)。

◎中干し・溝切り

近年、初期生育遅延のため中干し開始が遅くなっています。8葉期からは中干しへの準備をします。高温のため生育前進する可能性があるので適期を見逃さないようにします。深水管理は8.5~9.5葉期の1週間に実施します(水深15cm以上)。少し早いと感じても時期になったら中干しを始めましょう。併せて「溝切り」は水管理の効率性、節水性を良くします。ブームスプレーヤーの車輪跡でも代用できます。ただし、排水口に溝を必ず繋げてください。

◎追肥

高温登熟となった場合、肥切れを起こしてしまい、小粒化や白未熟粒などの障害が発生しやすくなります。幼穂形成期と減数分裂期に生育栄養診断を行い、生育、中干し状況、基肥量、天気予報を確認するなどして総合的な判断のもと、追肥の是非を決定します。

◎水管理

中干し以降は、飽水管理または間断かん水とします。溝切りの効果はまさにこれから。高温時は地温を冷ますことを目的に水の入れ替えなどをします。また、地域全体で水が必要とする時期ですので、外周溝切り跡へ水を素早く渡らせ、用水を次田に回しましょう。協力し合って水回しをお願いします。

◎適期刈り取り

高温で刈り取り適期は前進します。9月に入ったらいつでも刈り取りできるよつ8月中旬には準備を済ませておきましょう。少し早めにスタートするくらいがちょうどよいです。9月に入ったら稲刈り！



◎いもち病

いもち病菌は稲わら、もみ殻に付着して越冬します。育苗ハウス周辺に放置しないようにしてください。種子消毒と育苗期防除、箱処理剤での防除を基本に、定量を確実に散布します。田植え後の余り苗の放置は伝染源となるため厳禁です。常発地や前年多発地では、箱処理剤を使用しても、オリゼメート粒剤の本田追加防除も検討してください。

◎紋枯病

近年、増加傾向にあります。7月下旬頃に発病株率が15%を超えたら本田防除が必要です。出穂前までに「モンカッター剤、モンガリット剤、モンセレン剤」を散布します。また、箱処理剤で予防できるものもあるもので、本田防除と組み合わせで使用します。

◎斑点米カメムシ類

出穂までは、ほ場内と畦畔の雑草管理を徹底します。雑草が無いところには寄つてきません。薬剤防除は出穂期10日後の1回が基本ですが、2回目防除の検討も必要です。雑草対策で発生密度を下げて、適期の薬剤防除で発生個体を対策します。



このページは秋田県農業共済組合との共同発行です。